

陸自駐屯地紹介シリーズ 第39回

14(伊予)特科隊の松山駐屯地 第14特科隊他

駐屯地シリーズ編纂委員会

或る愛媛県人の回想

松山の人々は、市の中心に聳える松山城と、その丘を、敬意と愛情を込めて「お城山」と呼んでいたそうである。松山の名産に「ひのかぶ」と呼ばれる専ら漬け物にされる赤い蕪があるが、松山人は「お城山が見えるところでない」と「ひのかぶ」は出来んのよ」と誇ったという。さる東京人の偕行社会員の母上は松山の出であったが、松山時代を思い起こされ「毎朝、高浜(漁港)から魚を売りにくる『おたさん』という女衆がいた。その魚を食べて育つたら東京の魚なんか食べられない」とお国自慢をするのが常であったと。そしてその会員が陸士に合格した時に、母上は「それではお前もいずれ聯隊から別当さんが馬を曳いて迎えにくるのかね」と言われ「もうサイパンの後だからね、女親ってなんというこ

とを言うのかと思つた」と苦笑しておられたが、松山の人にとって「お城山」の下にある「聯隊」とはそれほどに親しい、大切なものだったのであろう。日本陸軍は国民軍であった。壮丁は聯隊区から集められたし、将校も陸士を出ると原則原隊に勤務し、土地の県立高等女学校卒の才媛を娶つたものだという。だから土地の人々にとって「聯隊」は、多くは藩の衣鉢を継いだその地方の象徴であった。

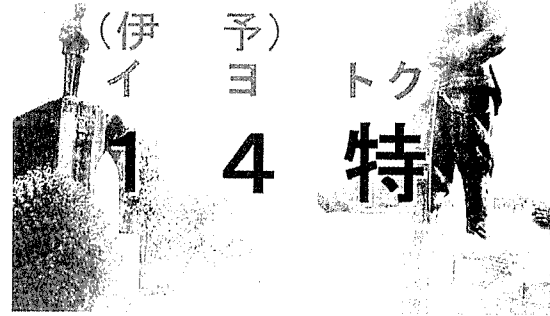
このことは別に松山に限つたことではない。また愛媛県下で編成された部隊は大東亜戦争末期まで幾つかあるが、松山人が「聯隊」と言えばやはり代表は明治19年に軍旗を下賜された歩兵第22聯隊である。

諸賢は既にご承知のことと思うが改めて迎えることをお許し願いたい。

日清戦争 明治27年8月1日、我が国は清国に宣戦した。22聯隊第2大隊は、8月3日兵営を発し、5日、日本海側の元山、その後は難路を克服して半島を横断し15日には京城に到着し在京城の大島混成旅団と合流した。聯隊主力は8月14

日兵営を発し、清国北洋艦隊の間隙をぬって仁川に上陸し8月23日京城西郊外の第一陣だつた訳で、在京城官民一同の安堵に思いを致したい。その後平壤、鴨緑江渡河、九連城、鳳凰城と常に激戦を重ね、明治28年3月31日休戦の日まで緊要な正面で戦い抜き、明治28年7月13日大連で乗船、凱旋したのである。故郷では凱旋式に続き招魂祭が盛大に挙行されたとのことであつた。

第14特科隊の愛称



伊予 14 特科

は明治37年2月16日宣戦を布告した。歩兵第22聯隊は第11師団隷下で出征し緒戦の旅順西側の大弧山、小弧山の急峻な地形と、ロシア旅順艦隊からの砲撃を受ける苦戦を戦い抜いた。漸く目標を奪取した後、聯隊は第11師団の旅順東鶏冠山攻撃に第一線として第一次攻撃から第三次攻撃までの全てで奮戦した。この旅順攻撃間の第22聯隊の戦死傷者は4千300名を超えたと云う。実に聯隊出征時の人数を超える損害であつた。

この多大な犠牲の意味について近年賢しらげにあげつらう風潮がある。曰く「人命軽視作戦」、曰く「愚将統帥」、果ては日露戦争そのものを「西欧帝國主義国家の仲間入りした侵略戦争」などと、いずれも我が国を貶める論調である。冗談ではない。旅順攻略に拙速な点があつたとすれば、それはバルチック艦隊の到着前に旅順艦隊を壊滅させるためのやむを得ざる攻撃強行だつたのであり、連日艦隊の迎撃準備を可能にし、日本が壊滅しないための激戦だつたことに何故思いを致さないのか。なぜ英露方の敗戦を「新生の我が国が自らを守る為に払わざるを得なかつた偉い犠牲」と素直に考えないのか。

ますらおの かなしきいのち つみかさね

つみかさねまもる やまとしまねを
 (靖國神社遊就館掲歌)

正にこの一首が歌いあげる心を理解出来ないのか。肉親の犠牲を報国の献身として悲嘆を堪えようとしていた老いた父母、妻子たちに対し「無益な犠牲」ということは、人間として許されることではない。

しかしながら明治の人たちは判っていた。英霊がたの犠牲の頭彰は、聯隊が故國の地に帰還した時の官民挙げての凱旋歓呼と招魂の儀式で行われた。またその後明治40年4月30日東京青山で陸軍凱旋觀兵式が挙行され歩兵第22聯隊長以下142名の将士が参加しているが、その影に亡き戦友の方々も参加しておられたという認識もあるという。

大東亞戦争

昭和14年5月、「軍備改編一(4單位から3單位へ)が行われ、当時滿洲にあつた歩兵第22聯隊は第24師団隷下となつた。そして徵募区は愛媛県から北海道に代わり、これにより兵員は北海道から補充されたが、聯隊の伝統と精強を受け継ぐ下士官、古兵は暫く愛媛県人が大部分を占め大陸に転戦した。戦況いよいよ迫り来た昭和19年8月、聯隊は沖繩に転用された。当初恩納村、金武村、読谷村一帯の防衛担任であつたが、19年12月になると沖繩から1コ師団抽出、台湾転用の大本營方針が示

され、第24師団は那覇南側から湊川を結ぶ線以南に配備となり、歩兵第22聯隊は日夜急工事に邁進した陣地を捨てて那覇南側、豊見城一帯に防衛陣地を構築したのである。

更に「何でこの時期に」と言いたくなるが、第62師団長、歩兵第22聯隊長が人事異動で交代した。米艦載機67機の爆撃を受け、沖繩戦間近と考えられる最中の交代であつた。事実その2週間後の4月1日、米軍は嘉手納正面上陸した。我が軍の微弱な配備もあり、その日の内の中飛行場、北飛行場は敵の手に落ちた。その後聯隊は一時62師団の危急を救うため陣地を捨てて北進した。5月4日の攻勢では軍主力の一部として攻撃に参加した。しかしその攻勢は成功せず、その後じりじりと敗勢に落ちて5月22日第32軍は喜屋武半島への後退を下令した。

それ以後は消耗に耐えるだけの日々が続いた。6月17日聯隊長以下玉碎、師団司令部に預けられていた軍旗は6月22日奉焼、ちりぢりになった聯隊長兵は小部隊となつて本土の防衛準備のために1日でも1時間でも長く生き残つて只ひたすらに抗戦を続けたのである。その勇士達が矛を収めたのは9月4日だつたという。

愛媛県松山市

愛媛県は四国西北部に位置し、県庁

所在地は松山市である。県の東予と称する地方は工業地帯、中予地方は政治経済教育、南予は農業・漁業主体に分業化しており、面積は四国第2位約5千600平方km、人口は四国第1位約147万人を擁している。温暖な気候を受けて気質は穏和であると云われている。

県は海岸部、内陸部で風光明媚な景観に恵まれ、中でも石鐘山は四国最高峰の山として、又「夜行名」ゆかりの霊場として古代への想像を誘っている。松山市は、幕藩時代から伊予松山藩久松家の城下町として現在も賑わっており、市内の繁華街はJR松山駅周辺と伊予鉄道城南線一番町南側周辺に分かれているが、その伊予鉄道城南線の北側に城山公園がありその中に美術館、博物館、図書館が並んでいる。さらに東側公園は市内を見下ろす高い丘となつておりその上に冒頭触れた松山城跡天守閣がある。私が宿泊した日没後、雨模様様の黒色の空を背景としてライトアップに白く浮き上がった天守閣は幻想的でした。

この近くに「秋山好古・真之兄弟生誕の地」がある。

日本最古の温泉として3千年の歴史を誇る道後温泉は松山市の東北東、直線距離にして約2kmの位置にある。聯隊の戦史を読んだ後は、不謹慎と感じ道後まで足を伸ばし得なかつた。やや残念に思うところである。松山駅前の路面電車で珍しい光景を目にした。小型蒸気機関車の形をした車両が汽笛を鳴らしながら路面を走っている。坊ちゃん電車と呼ばれアメリカ西部開拓時代の汽車そのものであつた。

念に思うところである。松山駅前の路面電車で珍しい光景を目にした。小型蒸気機関車の形をした車両が汽笛を鳴らしながら路面を走っている。坊ちゃん電車と呼ばれアメリカ西部開拓時代の汽車そのものであつた。

松山駐屯地へのアクセス

東京羽田空港から約1時間20分で松山空港に着く。現在は2千500坪の滑走路となり、ジャンボジェット機の離着陸も可能となつた。リムジンバスで松山駅前まで行き、その後伊予鉄道横河原線の牛湫団地前で降りると20分ほどで陸上自衛隊松山駐屯地である。

筆者は市内のビジネスホテルに一泊し、翌早朝駐屯地広報班から迎えに来て頂いた。約10キロの行程途中田園風景に代わる頃から嬉しい姿を目にした。通勤途上の戦闘服装の自衛官が続いているのである。これは自衛官がユニフォームで町中を闊歩していることを意味する、これを受容する市民の方々のところに松山聯隊への愛情が継承されていると感じるのはあながち思いつきでもないと感じた。筆者にとつて第一次安保改定、第二次安保改定、更に昭和40年代末の恵庭事件判決頃から唇を噛む思いで控えてしまった街中の制服・戦闘服姿を、松山の諸官が復活させているのを見た嬉しさ・羨ましさがあつた。

約25分の走行の後に松山市南梅本乙115陸上自衛隊松山駐屯地について。着いたのは7時40分頃、国旗掲揚前に雨の中、車で駐屯地内を案内して頂いた。先ず説明されたのは正門右側の警衛所に松山城にあやかった和風の外観を取り入れているとのことであった。入り口左側には本部隊舎があり、その前はグラウンドであったが工事用の仕切幕で区切られていた。新しく本部隊舎が出来上がる由である。グラウンドの奥に日本様式の屋根に覆われた厚生センターがあり、その奥に居住隊舎などが並んでいる。

其処から一段坂をおりた地域、二段おりた地域に車両・火炮、整備工場が並んでいた。その地域の建物が、真新しい建設直後の雰囲気を残している。これが「特科大隊」から「特科隊」に昇格したこと、高射特科中隊創設に伴う施設拡充工事の結果であるようだ。

駐屯地内の東端に珍しい場所がある。静かな雰囲気のある横穴式の古墳である。西暦700年代、高松塚古墳とほぼ同じころとされる播磨塚古墳群の一つである。この地の住人来自部小楯一族のものと伝えられているとのこと、古代のロマンがいろいろ隠れているに違いない。

駐屯地司令表敬

取材申請に対し駐屯地司令幸野英明1佐に時間を頂けるとの一報を頂い

た。有り難いことである。お話によると駐屯地は拡充のさなかということであった。現在本部隊舎建設中であり、竣工の後、現本部隊舎は取り壊されるが、これにより駐屯地のレイアウトは一変する筈である。

次に大隊級から連隊級に部隊規模が変わったことに対する地域の反応は好意的であって、その後、駐屯地創立記念式典、部隊見学、企業の生活体験等を通じて融和に努め成果を挙げていること、駐屯地に対する協力態勢も、後に触れる如く陣容も勢力も実績も素晴らしいことを伺った。また陸軍時代の歴史を大切にしている県民性についても嬉しく承った。

7月号6頁の富澤さんの論説によると、世界の軍隊は国民軍から職業軍に変わったとあるが、取材に各駐屯地を廻らせて頂く機会を与えられ、特に8月号に載せた岩手・宮城地震災害派遣の実情を見聞すると、職業軍である筈の自衛隊は少なくとも陸上に関しては辛いことに、各地に根ざし、信頼され愛される国民軍の美風を育成していると感じる。またそれでなければ、国土を守る陸上自衛隊の任務は達成できないであろう。ここまで漸く迫り着いたとOBの一員である筆者は思う。

ただ松山は特科主体であるのに実弾射撃可能な訓練場には恵まれていない

恨みがあるが、いずれの特科部隊、高射特科部隊も共通の悩みであるとも伺った。

副隊長概況説明

場所を変え森正人2佐から駐屯地の歴史と現駐屯部隊の概要を伺った。

駐屯地の歴史

陸軍時代、歩兵第22聯隊があったのは松山城内である。現在松山駐屯地がある場所はその聯隊の演習場であった。

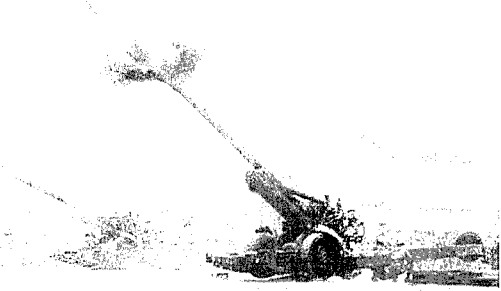
戦後警察予備隊が発足した昭和25年12月、最初に駐屯地が建設されたのは、松山市の西海岸近く、現在松山西警察署がある松山市三津浜で、警察予備隊の訓練場とされていた。26年5月に警察予備隊第9連隊第3大隊がこの地で編成されたが29年9月に北海道旭川に移駐し、ここに新たに第15普通科聯隊第3大隊が編成された。

だがその松山駐屯地が手狭・老朽化したため昭和30年10月に新たに陸軍演習場跡地の当時の小野村に移転し、小野駐屯地と名付けられた。35年3月には第30地区施設隊が編成されると翌36年12月、第15普通科連隊第3大隊が香川県善通寺駐屯地に移駐し、変わりに第108教育大隊が大府信太山駐屯地から移転してきた。その後42年3月小野村が松山市と合併したことによって松山駐屯地と改名された。44年7月31日

第14特科隊



19年特科検閲時の第14特科隊長幸野1佐



155mmりゅう弾砲 FH70

第108教育大隊が廃止されると翌日44年8月1日、第4陸曹教育隊が大府信太山から移駐して来た。

平成2年3月、第320地区施設隊が廃止され、平成6年3月第4陸曹教育隊は京都府大久保駐屯地に移駐、同月2混成団特科大隊が岡山県日本原駐屯地から移駐、平成18年3月第2混成団が14旅団に改編された事により松山駐屯地は現在の態勢となった

災害派遣

災害派遣の実績についてお尋ねした。ここでは幸い到大規模災害はここ暫くなく、山火事消火と異常濁水時の給水があるばかりである。しかしながら災害派遣に関する駐屯部隊の備え即ち平常の現地調査と防災地誌資料と計画修正、県及び市町村防災演習の参加など些かも怠りはないと自信に溢れた回答を頂いた。

最近の県レベル防災訓練は、県総合防災訓練に特科隊長以下40名、県石油コンビナート等防災訓練に特科第1中隊幹部4名、国民保護訓練に特科隊長以下40名が参加し、市町レベルの防災訓練も松山市、西条市、上島町、東湯町等に加わっているという。

多様化侵攻様相に備えて

この問題に触れた途端に副隊長の口は重くなった。「『懸念なく』と言ったまま、その先に進もうとしなかった。

OBとは言いながら一市井人に対して明かす事柄ではない。当然のことながら引き下がったが、表情にはどこか自信が窺えた。

協力諸団体

松山駐屯地には心から協力していただけの強力な組織がある。愛媛県経済界の第一人者を会長とする防衛協会を始め、9コ団体が折に触れ部隊に暖かい協力をよせて頂いている。これは「聯隊」に寄せる郷土意識ばかりでなく、駐屯地の地道かつ誠実な活動の成果でもあるに違いない。

駐屯部隊

第14特科隊

この部隊は前述のとおり第2混成団特科大隊から改編され特科隊と名称を変えたおり、指揮官は2佐から1佐に昇格した。これに伴い隊本部機能、敵砲兵情報収集機能、情報処理能力を増強した。編成は特科隊本部、本部管理中隊、第1中隊、第2中隊、第3中隊をもつて、旅団全般の火力戦闘を担当するのが任務である。その装備火器は最大射程30kmの155ミリりゅう弾砲FH170である。また愛媛県の大部分を警備・防衛担任地域として災害派遣等に当たっている。

愛媛県を伊予の同と云う。その読みを第14にかぶせた愛称「14特科隊」の呼び名は県知事も愛用する事となっ

た。「我が郷土部隊」と云う暖かい心に包まれるのである。

第14高射特科中隊

改編を機に指揮系統は旅団長直轄に変わった。81式短距離地对空誘導弾(短SAM)、93式近距離地对空誘導弾(近SAM)、対空監視レーダー、及び低空レーダーを装備し敵の航空攻撃から我が部隊及び施設を防護する対空戦闘の骨幹部隊である。南予の宇和島他3町を警備担当地区としている。

特科直接支援小隊

高射直接支援小隊

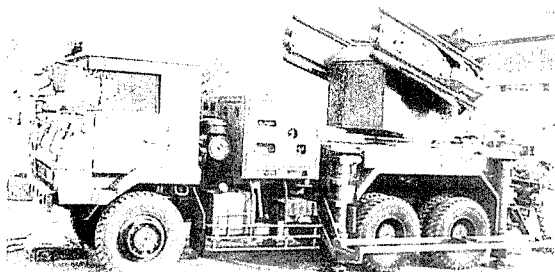
いずれも普通寺に所在する第14後方支援隊隷下の部隊で、特科隊、高射特科中隊の直接支援を行う為に松山に派遣されている。

松山駐屯地業務隊

松山駐屯地に限らないが、陸上自衛隊の駐屯地業務隊というのは陸軍にはなかつた組織であるから、その組織・機能について少し説明したい。

方面總監の直轄部隊であり、駐屯地の部隊・隊員の勤務・生活関連施設維持・管理、給食業務、福利厚生・共済組合業務、保健衛生業務、補給整備業務、演習場の維持管理等を任務とする部隊である。駐屯地の敷地、建物、演習場の維持管理には管理科管轄班があり、管轄を職務とする技官等が在籍している。駐屯地に於ける食事、及び演

第14高射特科中隊



81式短距離地对空誘導弾



93式近距離地对空誘導弾

習に出る部隊への食材給付には管理科給食班があり、栄養士、調理師などの資格を持つ専従員と各隊から交代で差し出される勤務員が業務を行っていた。近年の部隊の食事は著しく改善されて「美味しく楽しく」食事が出来るよう工夫されており、神代時代の先輩が見たら驚かれることであろう。福利厚生も近年業務の幅を広げている。

特に駐屯地内にある娯楽施設には目を向けた。オーデオルーム等文化教養のスペース、フィットネスルームなど健康維持増進施設など昭和時代には珍しかった光景が展開されている。これらの施設は近年厚生センターとして売店、食堂・喫茶店(隊員食堂とは別)図書室等と集約される傾向にある。又駐屯地医務室が設けられ、専属又は委託の医官と看護師が待機している。駐屯各部隊に対する燃料や衣服、消耗品の補給は補給科が行っている。また駐屯地と地域社会の接点としての業務も実施している。松山駐屯地業務隊長は2佐である。

第358会計隊

駐屯地の給与、旅費、調達等業務を行う部隊である。

基地通信隊松山派遣隊

松山駐屯地に於ける通信の維持構成運営を担当する部隊である。

第133地区警務隊松山連絡班

本部を香川県善通寺に置く地区警務隊の連絡班であり自衛隊内部の秩序と維持を任務とした部隊である。

心の目で見たい、駐屯地史料館

厚生棟の一隅に史料館があった。多数の展示品があり説明を頂いたが、私の目は我が国騎兵の父秋山好古大将の展示品を探していた。年月を経た秋山兄弟の大きな肖像画があった。さらにその傍に好古大将の揮毫があった。大將は帝国陸軍騎兵部隊を育成し、日露戦争に於いては世界一を誇るミシチェンコ騎兵集団相手に見事な戦いをして勝利に貢献し、教育總監、陸軍大将に昇進された。だがその生涯を更に輝かしたものは軍役を退いた後の生き方であった。地味な地方私立中学の校長であった。燦然と輝く日々ではなく晩節を薄墨のような地味な毎日閉じこめた感さであった。だが軍人時代の燦然たる光は消えるものではない。愛媛県人が敬仰する兄弟の肖像、その眼光、好古大将は拝観する筆者の心を見透すが如く、真之中將は遙か未来を見つめるが如く鋭かった。

紙碑に残る郷土部隊の歴史

前述の歩兵22聯隊概史は『愛媛の郷土部隊』を参考としたものである。読む間に感情は激しく揺すられ、読了に多大のエネルギーを必要とする一冊であった。著者河合勤氏は56期、近衛歩

兵第4聯隊旗手・中隊長の経歴を持つ方である。愛媛県立図書館内の「愛媛文化叢書」で県の文化全般に渉る叢書の1冊としての刊行であり、広く県人に頒布された郷土の紙碑であることは間違いない。

次は愛媛新聞昭和37年6月2日から80余回に渉って掲載された「沖繩戦記歩兵第二十二聯隊の最後」なる記事をコピーし手製で編纂された一冊である。大東亜戦争の記憶も新しい時期に掲載されたこの記事の激しさは多くの読者も息を飲んだことであろう。

3冊目は歩兵第22聯隊忠魂碑建立十周年記念写真集である。この写真集の最初に見開きで除幕式の時の忠魂碑の姿が掲げられている。碑は昭和54年3月4日に愛媛県護国神社に建立された。第2ページ以降は建立十周年を迎えた式典の写真である。キャプションに変えて幾編かの追悼の辞と10枚を超える写真が掲載され、散華された英霊がたに悼みの心を捧げる群像が写っている。その姿は何よりも県民が聯隊を懐かしみ慕ふ心の記録であると考えられる。

今回取材で司令職務室長佐伯1尉、駐屯地広報班長二神准尉に大変お世話になった。心からお礼申し上げます。

文責 松村興延 陸自64